

二〇一九年度

上宮学園中学校入学考査問題（一次一般学力型）

国語

（注意）

- （1） この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。
- （2） 問題は「一」から「三」まであります。試験時間は五十分です。
- （3） 解答用紙は別に一枚あります。
- （4） 解答用紙には、必ず受験番号・名前を記入しなさい。
- （5） 「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『科学』と『学習』にカギらず、私たちはお互いの買ったものを交換して読み合う。趣味が合わない時もあるけれど、少なくとも、学研の雑誌は、お互いに黙って読む。

うみかの『科学』は、やはり『学習』に比べて漫画が少ない分薄くて、文章も説明文みたいに淡々としてる記事が多かった。あるいは、この勉強っぽいページも、うみかにとっては、遊びに見えてるのかもしれない。だけど、私には違う。

「お姉ちゃん。」

話しかけられて、「ん？」と『5年の科学』から顔を上げると、うみかが「お願いがあるんだけど」と話しかけてきた。

「来月から、『6年の科学』を買ってくれない？」

「え。」

うみかが「お願い。」と頭を下げた。この子にこんなふうにされたことは、これまでで一度もなかった。うみかが開いた『6年の学習』の裏表紙の見返しに、来月の『科学』と『学習』両方の予告が出ていた。見て、あっと思う。『科学』の方に、『特集・宇宙はついにすぐそこに』の文字が見えた。

気持ちが **A** した。

クラスの子の中には、『科学』と『学習』両方を買っている子もいる。だけど、うちはそういう家じゃなかった。まだ一年生の頃、お母さんから、片方だけだと釘を刺された。

「いやだよ。」と、い、い、ハンシヤ的に声が出た。

あんまりんじゃないか。うみかがどれだけ宇宙のことを好きか知らないけど、だからってそのために私から楽しみを奪う権利なんかない。だいたい、普段あんなに生意気な態度を取ってるくせに、こんな時だけ調子いい。

「私だって、『学習』が楽しみなんだもん。いいじゃん、五年の読んでれば、来年になれば、嫌でもあんた六年になるでしょ。」

「今年じゃなきゃ、ダメだと思う。お願い、お姉ちゃん。」

すぐに折れると思ったのに、食い下がったのがさらに生意気に思えた。私だって、『5年の学習』を読むの我慢して、一度だってうみかに頼んだことなんかなかったのに。①にらみつけると、うみかが思いがけず、必死な声で続けた。

「今年の『科学』は、特別ななの。」

「どうして？」

「注毛利さんが、九月に、宇宙に行くから。」

私はあっけに取られた。うみかの目は真剣だった。「お願い。」とまた、くり返す。

「五年のより詳しく、そのことが載るかもしれない。今年じゃなきゃ、ダメなの。」

「……そんなに好きなの？」

毛利さんや宇宙への情熱のせいなのか、それとも私とケンカしてコウフンしてただけなのか、わからないけど、うみかの目が赤くなっていた。こくん、と無言でうなずいて顔をふせる。開きっぱなしの来月号の予告ページに、ぽとぽと涙の粒が落ちた。

二人してお母さんに、『6年の科学』『6年の学習』、両方を買ってくれるように頼みに行く。お母さんは「ふうん。」とうなずいた後で、

うみかに「じゃあ、頑張らなきゃね。」と告げた。

「うみか、逆上がりできるようになった？」

うみかの全身にびりっと電気が通ったように見えた。

X

っていう顔だ。

「うみかだけでできなくて居残りになったって、この間泣いていたでしょう？ みんなに笑われたって。」

うみかは答えなかった。私は驚いていた。

② この子が悔しがるとか、人の目を気にするところなんて想像できない。何かの間違いなんじゃないかと思っていいたら、お母さんが「好き嫌が多いからよ。」とうみかに言い、さっさと台所に戻ってしまう。

結局、『6年の科学』のツイカがオーケーになったのかどうかはわからないままだった。

その日の夕食、うみかがナポリタンのピーマンを、時間をかけて丸呑みする音が、横の私にまで聞こえた。顔色を悪くしながら、無理して片づけていた。

うみかはとらえどころがない。

ピアニカを忘れた、その日もそうだった。五年の教室を訪ねて貸してくれるように頼むと、うみかが少しだけ不思議そうな表情を浮かべた。

B

したような、息を呑むような。

だけどすぐに「わかった。」とうなずいて、水色のピアニカケースを持ってきてくれる。

ひょっとして、ピアニカのホースで間接キスになるのが嫌なのかもしれない。だけど、別にいいじゃないか、姉妹なんだから。他の学年にどれだけ仲がいい友達がいたって、さすがにピアニカは借りられないだろうけど、姉妹だったらそれができる。私は得した気分だった。

びっくりしたのは、授業の後、借りたピアニカを返しに行った時だった。うみかの近くにいた五年生が「あれ、うみかちゃん、ピアニカあったの？」と私たちに声をかけてきた。

「忘れたんだと思ってた。お姉ちゃんが持ってきてくれたのに、間に合わなかったの？」

「うん。」

うなずくうみかは落ち着いていた。ピアニカの側面に書かれた平仮名のうみかの名前が、私たちの間で間抜けに浮き上がって見えた。私は自分のミス^{さと}を悟る。あの不思議そうな表情の意味はこれか。

「——同じ時間、だったの？」

「そう。」

「言ってくればよかったのに。」

「だって。」

短く答えるうみかの口調に怒おこっているそぶりはなかったけど、それがよりいっそう私にはこたえた。ピアノ力を忘れてみんなの間に黙って座る妹を想像する。六年の教室からも、きっと私たちのピアノの音が聞こえてきたはずだ。その音を聞きながら、下の階で座り続ける気持ちちはどんなものだっただろう。

唇くちびるを引き結ぶと同時に、胸の奥おくがきゅっと痛んだ。素直すなおに言葉で謝あやまることができないほど、気まずかった。

「逆上さかあがりがりの練習、してる？」

尋ねたずていた。うみかがぱちくりと目を注つしばたたく。

私は逆上さかあがりがり、得意だった。

③「一緒に練習いっしょしよう。」

罪滅つみほろぼし、というほどの意識はそれほどなかった。ただ、一人きりみんなのピアノ練習を見つめる妹を想像したら、それが逆上さかあがりの居残りをさせられる姿と重なって、私の胸を締めつけた。

うみかをバカになんかさせない、と強く感じたのだ。

④ 鉄棒の特訓は、近所の『ちびっこ広場』で放課後にやることにした。私が一緒にやろうと言う前から、うみかは毎日ここで練習していたらしい。

毛利さんが宇宙に行くのは九月。スペースシャトルエンデバーの名前をテレビでも少し前から紹介しょうかいしてる。

「そんなに楽しみなの？」

「楽しみ。」

別に意地悪で聞いたわけじゃなかったけど、うみかの返答は短かった。

鉄棒を両手で握にぎり、えいっと空に向けて蹴けり上げたうみかの足が、重力に負けたようにぱたん、と下に落ちる。

「足、持ってあげようか。」

私が逆上がりができたのは一年生の時だ。その時、先生やお父さんが、練習する私の足を捕まえて回してくれた。

「重いよ。」

「大丈夫だよ。」

b 安請け合^{やすう}いしたけど、うみかがえいっと足を蹴り上げたらかなり迫^{はくりよく}力があつた。捕まえそこねて、さらにもう一回。思いきって手を伸ばしたらうみかの靴^{くつ}の先が額をかすめた。

「いたっ。」

「あ、ごめん。」

ぶつかった場所を押^おさえてうずくまった私に、うみかが近寄る。「だから言ったのに。」と。

「いいよ。私、自分で回れるようになるから。」

「私はいなくてもいいってこと？」

じんじん痛む額を押さえながら見たうみかの顔が、表情をなくした。おや、と思う間もなく、うみかが首を振^ふる。

「ううん。いて欲しい。」

今度は私が表情をなくす番だった。そんなふう^{ほう}に素直に言われたら、逆^{さか}らえなかった。

「——見てれば、いいの？」

「うん。お願い。」

C

うなずいて、それから何度も何度も、空に向けて足を蹴る。

⑤ 「エンデバーってどういう意味か知ってる？」

何度目かの失敗の後で、うみかが息を切らして言った。手のひらが赤茶色になって、見ているだけで鉄^{てつ}の匂^{にお}いがかけそうだ。

私は「知らない。」と首を振った。

「努力。」とうみかが答えた。

そらにうつすらと藍色あいろが降りてきて、薄い色の月が見え始めてしばらくした頃、うみかがとうとう練習をやめた。妹が鉄棒を離はなれたのと入れ違いに、今度は私が逆上がりをする。

足を上げるとき、つま先の向こうに白い月が見えた。今日、うみかは何度も何度もこうやって、私と同じように、月を蹴ってたんだなあと思った。

逆上がりを成功させて、D 地面に降りた私に向け、うみかが「いいなあ。」とつぶやいた。

「思いつきり走ってきて、その弾はずみの力を借りるって手もあるよ。」

自分が最初の頃、そうやって初めて回れたことを思い出す。こんなふうには、とお手本で回って見せた。二、三メートル離れた場所から走り、その勢いで鉄棒をつかむ。月を蹴り、ぐるんと回る。

「こう？」

うみかが真似まねして、同じように走る。ぎこちない走り方だったけど、そのまま鉄棒をつかんだら、これまでで一番勢いよく足が上がった。あと少しできれいな円が描えがけそうだった。

「惜おしいっ！」

思わず声が出た。6 うみか自身、驚いた顔をしていた。

「まだ、練習してもいい？」

「このやり方で、明日からもやってみなよ。今日はもう遅おそいよ。」

家に帰ると、もう七時を回っていて、私たちは、おじいちゃんとお母さんに叱しかられた。お父さんがまだ帰ってきてなくて、よかった。

「明日も練習、一緒に来てくれる？」

うみかとひさしぶりにお風呂ふろに一緒に入った。鉄棒をつかみすぎたせいで感覚がおかしいのか、うみかが何度も手をグーとパーに動かして

いる。

⑦ 「いいよ。」と私は答えた。

誰かが何かできるようになる瞬間しゅんかんに立ち会うのが、こんなに楽しいとは思わなかった。

(辻村 深月『家族シアター』による)

注 毛利さん……日本人で二人目の宇宙飛行士。一九九二年にスペースシャトルのエンデバー号に乗りこんで宇宙へ行った。

しばたたく……何度もまばたきをする。

問1 ——線部あゝえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問2 **A** **D** に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア にやりと イ きよとんと ウ どさっと
- エ すとっと オ こくりと カ ざわっと

問3 ——線部 a 「釘を刺された」・ b 「安請け合い」の文中での意味としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

a 「釘を刺された」

- ア 意地悪をされた
- イ きつくしかられた
- ウ 念をおされた
- エ お願いされた

b 「安請け合い」

- ア すっかり安心すること
- イ 不安な気持ちをかくすこと
- ウ 積極的に手伝うこと
- エ 軽々しく引き受けること

問4 — 線部①「にらみつけると」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア これまで見たことのないうみかの行動を見て、何か悪いことをたくらんでいるのだろうと直感したから。

イ 「私」が『科学』を読みたくないのを知っていて、わざと買うように頼んできたことに腹が立ったから。

ウ うみかがどれだけ本気で『6年の科学』を買うように頼もうとしているのか、試^{ため}してやろうと思ったから。

エ 「私」から『学習』を読む楽しみを奪おうとするうえに、簡単にあきらめないのが生意気だと感じたから。

問5 X に入る言葉を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ふざけるんじゃないわよ イ 痛いところ突^つかれた

ウ 何を言っているんだろう エ どうやってごまかそう

問6 — 線部②「この子が悔しがるとか、人の目を気にするところなんて想像できない」とありますが、「私」はうみかのことをどのように

思っていますか。文中から九字でぬき出して答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問7 — 線部③「一緒に練習しよう」とありますが、この時の「私」の気持ちを説明した次の文の 1 2 に入る言葉を答

えなさい。ただし、 1 2 は十字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

「私」にピアニカを貸したせいでみんなの間に黙って座ることになったうみかの姿を想像すると、逆上がりができなくて

1 うみかの姿と重なってたまらない気持ちになり、そんな妹を 2 、と強く思った。

問8 — 線部④「らしい」と同じ働きのものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 彼のふるまいはいかにも専門家らしい。

イ よちよち歩きの赤ちゃんはかわいらしい。

ウ 人知れず努力を続けるのはすばらしい。

エ 駅前に新しいスーパ^ーができるらしい。

問9 ———線部⑤「エンデバーってどういう意味か知ってる？」とありますが、うみかはなぜこのように聞いたのですか。その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 問題の答えとしてエンデバーという言葉の意味を口にするので、自分ももう少しがんばろうと思ったから。
- イ エンデバーという言葉の意味を知れば、姉もきっと自分のように宇宙にきょうみを持つはずだと考えたから。
- ウ 姉はエンデバーの意味を知らないはずなので、ここで知識を見せつければ自分が優位に立てると思ったから。
- エ 最近知ったエンデバーという言葉の意味がすてきななので、姉にもぜひ知っておいてほしいと考えたから。

問10 ———線部⑥「うみか自身、驚いた顔をしていた」とありますが、うみかはどのようなことに驚いたのですか。その内容としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア お姉ちゃんが自分をはげまそうとして、大きな声で「惜しいっ！」と言ってくれたこと。
- イ お姉ちゃんの教えてくれた逆上がりの方法を、自分が素直に真似してみようと思えたこと。
- ウ お姉ちゃんの真似をして逆上がりを試してみたら、思っていたよりもずっとうまくいったこと。
- エ お姉ちゃんと一緒に、いやだった逆上がりの練習を夜おそくまで夢中になってしていたこと。

問11 ———線部⑦『『いいよ。』と私は答えた』とありますが、はじめのころと比べて私のうみかへの気持ちはどのように変わりましたか。「逆上がり」「応えん」という言葉を必ず使って、解答らんに合うように**四十五字以内**で答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

1-1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

みなさんは、いつ森に入りましたか。森を歩きましたか。

日本は、国土のおよそ三分の二が森林なのにもかかわらず、「森を歩く」という文化があまり育っているとはいえない状況です。

ドイツやオーストラリアなどに行くと、家族でのピクニックなども含めて大勢の人たちがごく自然に森の中を歩いているのを目にしますが、日本では以前はそのような人をほとんど見かけませんでした。

かけるようになりました。時を経てようやく日本でも、(森林の力^あを見直す前兆になるのかどうかわかりませんが)中高年の人たちや^注山

ガールと呼ばれる若い女性などが山に入ってくるようになりました。山のもっている多くの魅力が人々に伝わりはじめたのだと思います。

逆に、私たちのように山で暮らす人間は、みんなが入ってこられるような道路の整備を積極的に行うことが必要な時代になってきたと思いま

す。私の場合、^注間伐した木材の運び出しと手入れ作業のために、二・五〜三メートル幅の作業道を造っていますが、林業作業以外にもさま

ざまな目的に使えるように心がけています。「ア」

森に入ってみると、森林の状態がどうなっているかに気づくはずです。そして、森のために何ができるのか、一人ひとりがぜひ考えて、行動を起こしてほしいと願っています。

B 暮らしの中で、家屋や家具の材料などに国産の「木を使う」ことを通じて、日本の森林や林業を応援しようという方法もあると

思います。

私の理想の森林は、鹿児島県屋久島の、有名なウィルソン株周辺の「小杉」と呼ばれる、二〇〇〜三〇〇年生のスギと広葉樹の^注融合した

森林の姿です。このような森は世界中でもそんなに多くはありません。放っておくと^注林床から広葉樹が育ってくるような環境で、スギや

ヒノキの人工林を育てている私にとって、そのような森林づくりは林業の^注醍醐味であり、夢でもあります。「イ」

林業は、自然に一番負荷をかけて行う職業の一つです。「自然に負荷をかける」とは、つまり、自然にしておけばそのまま伸びたいように

伸びていく木の枝を整えたり、雑草を刈り取ったり、**C**、もっと成長を続けようとする樹木そのものを^注伐採するなど、いわば自然

に逆らった行為こういを行っているということです。ですから、負荷をいかに少なくするかということを考えると、理想的なのは高樹齡こうじゅれいの木を増やすことであり、さまざまなタイプの木が生いしげる森（混交林といいます）をつくるということになります。

自然災害などの危険性はともないますが、「遠くからながめると針葉樹の山に見えるが、中に入れば広葉樹の高木や低木があり草が生えていて、苔こけむした石の間をちよろちよろと沢さわの水が流れている」といったぐあい森です。

（中略）

山仕事を行っているとき、人間の生き方に関していろいろと自然から教えられることがあります。「ウ」

たとえば、広葉樹を伐採すると、萌芽ぼうがといって、切り株から多くの芽が出てきますが、そのままにしておくと、おたがいがいキョウソウウし合って枯かれたり、木が密集③して細くなってしまったりします。そこで私たちは、それらの中から将来大きく成長していきそうな力強い芽を選んで、それ以外を取ってしまう「芽かき」という作業を行います。残した芽に養分を集中させることによって、早くりっぱな木に成長できるようにするためです。

このとき、最初から一本にしてしまう場合と、二、三本残しておいて数年後にあらためてどれを残すかをハンダンうする場合があります。

D

Y

からです。せつ

かく残した一本が動物たちに食べられたり、雪の重みで折れてしまったりと、思いもよらないことが起こる可能性もあります。ですから、どれが良いのかははっきりとわからない場合は、結論を急がずに、時間をかけて見極めることが必要な場合もあるということです。

人間も木と同じで、いろいろな芽を持っています。私のように小さいころから林業で生きていくんだと決めて、それだけに向けてやっいく者や、子どものころの夢はあれもこれもあつたけれど最終的に一つにしばって職業を選ぶという人もいます。「エ」

いずれにしても、一度就職したら一年や二年であきらめることなく、五年一〇年がんばることによって、社会に貢献こうけんできるように大きくりっぱに成長していくものです。そして、そのためには、土壌どじょう（就職先）に根を張るための養分（知恵や体力）を、小さいころから作っておくことが大切になると思います。そしてその間に、二酸化炭素を吸収してきれいな空気をつくったり、水をたくわえてきれいにしたり、土をしつ

かりおさえて土砂くずれをフセいだりしながら、社会に貢献します。

(田中惣二『本当はすごい森の話』による。)

注 山ガール……登山用のスカートや色の美しい小物など、女性らしい服装を取り入れながら登山やハイキングを楽しむ女性。

間伐……木の生育を助けたり、光を採り入れたりするために、適度に木を切って数を減らすこと。

融合……とけあって一つになること。

林床……木のかげになって光が届きにくく、それに適応した植物が生える場所。

醍醐味……深い味わいや本当の楽しさ。

伐採……山林の樹木を切り出すこと。

問1 ——線部①『森を歩く』という文化があまり育っていないとはいえない」とありますが、これまで「森を歩く」という文化が育っ

てこなかった理由を説明した次の文の [1] [2] に入る言葉を答えなさい。ただし、 [1] は五字、 [2] は

十二字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

気軽に森に入るための [1] が十分だったとはいえず、 [2] もあまり知られていなかったから。

問2 [A] [D] に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば イ しかし ウ おしろ

エ だから オ さらには カ つまり

問3 ——線部あくえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問4 次の一文は、文中の「ア」～「エ」のどこに入りますか。一つ選んで、記号で答えなさい。

迷ったときは、時間をかけて考えてもいいと思います。

問5 線部②「理想の森林」とありますが、自然にとって理想的なのはどのような森林をつくることですか。文中の語句を使って、解答

らん合うように**三十字以内**で答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問6 線部③「密集」と同じ成り立ちになっている熟語を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 速達 イ 危険 ウ 問答 エ 配給

問7

Y

に入る言葉としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 時間が経てば、「芽かき」前の状態にもどせる

イ いくら悩んでも、結論を出すことはできない

ウ いったん切ってしまうと、取り返しがつかない

エ その間にいろいろな経験をすることができる

問8 本文の内容を説明した文として**ふさわしいもの**を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 山で暮らす人々は、「森を歩く」という文化を世の中に広めるために日夜苦勞を重ねている。

イ 林業は自然に負荷をかけるため、できるだけ自然のまま木を育てるようにするのがよい。

ウ 将来の目標はできるだけ早く決め、それに向けてひたすら努力を重ねることが大切である。

エ 人生においてもいろいろな可能性を想定して、じっくり時間をかけて考えることが必要である。

二 次の1～10の（ ）に入る言葉をひらがなで入れて、下の意味に合うように慣用句やことわざを完成させなさい。

- 1 あげ（ ）をとる……相手の失敗につけこむこと。
- 2 （ ）が回らない……借金が多くてやりくりができないこと。
- 3 （ ）を割ったような……性格がさっぱりしていて、小さいことにこだわらないこと。
- 4 とりつく（ ）もない……たよりにできるものが何もないこと。
- 5 火に（ ）を注ぐ……事態を余計に悪くすること。
- 6 （ ）をたたいてわたる……用心に用心を重ねること。
- 7 （ ）をつく……すっかりなくなってしまうこと。
- 8 目から（ ）が落ちる……あるきっかけで、急に物事がよく理解できるようになること。
- 9 根ほり（ ）ほり……細かいところまで徹底的てっぺいてきに行うこと。
- 10 うりのつるに（ ）はならぬ……子供は親に似るものだということ。